

鏡物における「才」

陳 文 瑤

はじめに

中古、「才」は特に漢詩文を読んだり作りつたりする能力を指していたが、広く漢籍に関する学識・教養や、さらに書、歌、音楽など、芸術方面の技術や能力を意味することもあった。『大鏡』の「才」については、広瀬裕美子氏は、「才」が「大和魂」と対照的に用いられ、政治上の敗北者が備える特質として扱われていると、論じていた。また、大木正義氏は、『今鏡』では、人物評価において「才」が多用されると指摘し、『増鏡』の「才」の諸用例について簡単な説明を施した。しかしながら、『大鏡』以外の鏡物の「才」がそれぞれの作品における人物評価にどう関わっているかの問題、また、評価の対象となる人物を選定する作者の態度などについては、先行論では全く触れられていなかった、というのが研究史上の実態であった。本稿では、このような研究状況を踏まえ、鏡物全般にわたる調査を進め、それぞれの作品における「才」観の有り様を見ていく。

一 『今鏡』の場合

『今鏡』において「才」ありと明記されている人物は、一五ページ【表一】の通りである。

まず、『今鏡』では、「才」の内容について、具体的に何を指しているのだろうか。

後白河帝の乳母である紀伊の二位の話から、その夫で、当時の政界の実力者であった少納言藤原信西に話が展開していく一節では、「かの少納言、唐の文をもひろく学び、大和心もかしこかりけるにや、天文などいふ事をさへならひて、才ある人になむ侍ける。」（すべらぎの下第三「内宴」・七九頁）とあるように、「才」が、広く学識・教養を指していると思われる。『大鏡』で、「才」が漢才に重きを置かれていたことに比べて、概念が広がっていると見えよう。同じく、藤原忠通が「身の御才は類なくをはしましき」という話では、「才」の内容は、詩歌・管弦・書道など漢学以外のものも含まれている。藤原公能の子である実定・実家・実守たちについて語る箇所は、「才などもはして、唐、大和の文作り給」というように、「才」は、広く「和」「漢」両方の学識・教養を指している。『今鏡』では、「才」について概念が、それほど厳密ではないと言えよう。

ところで、「才」ありと評されるこれらの用例を整理してみると、一六ページ【表二】のように、主に系譜の上からほぼ五つの流れにまとめることができる。

大木氏は、『今鏡』で「才」を評価された人物が、天皇から僧まで広い層を持っている、と指摘している。³¹しかし、系図からわかるように、『今鏡』においては、「才」がある人と評する際に、親から子へという「家」の意識が見えてくるのではないかと、稿者は指摘したいと思う。但し、【表一】³²藤原公能の箇所では、「御親、祖父などは、御才もをせせぬに」という表現があるが、今回、例外として扱う。これについて、さらなる検討が必要である。

それでは、『今鏡』の「才」に対する価値認識はどのようなものなのであろうか。

男咎あるべしなど聞へけれど、人からの品も、身の才などもはして、世もゆるしきこゆるばかりなりけるにや、もるともに心を合せ給へればにやありけむ、さてこそ住みはて給けれ。男その程は、宰相の中将など申けるとかや。後には左の大臣までなり給へりき。
(ふちなみの上第四「ふちなみ」・九三頁)

嫡子内親王と源俊房の情事について語るところである。傍線部の如く、「才」は、情事による咎め事を世間から許してもらう可能性があるあるかどうかの判断基準の一つとなっている。つまり、「才」は、世間に認められている評価の一つなのである。

中宮の御せうとたち、男も僧も、さまぐ多くおはしき。太政大臣雅実のおとと申は、中宮の一つ御はらからにて、六条の右の大臣の大臣におはしき。その御腹、治部卿隆俊の中納言の女なり。久我の太政大臣申き。いと御身の才などはおはせざ

りしかど、世に重く思はれたる人にぞおはせし。

(むらかみの源氏第七「むらさぎのゆかり」・二一六頁)
右は源雅実の略歴が語られる箇所である。久我の太政大臣の雅実は、傍線部のように、「才」があまりなくても、世間で重要な人物であると認識されている。このように、『今鏡』では、「才」があることが、肯定されているが、不可欠なものだとはされていない。さらに、『今鏡』では、『大鏡』のように、「才」そのものを、人物の幸、不幸と直接に関連づけていない。「才」そのものが導く人生の浮き沈みよりは、「才」に関わる「家」の方に、作者の関心があると思う。

二 『水鏡』の場合

『水鏡』では、「才」があると評価される人物が、五十二代の平城天皇・五十五代の仁明天皇・『大鏡』作者という三例しかなく、鏡物の中で、最も少ない。

つきのみかと平城天皇と申き桓武天皇の御子御母内大臣藤原良継か女皇后乙牟漏也延暦元年十一月廿五日に東宮に立ち給御年十二早良親王の御かはりなり同六年五月に御元服ありき大同元年五月廿八日位につき給御年卅二よをしり給事四年なり御心さどく御さえかしこくおはしましき

(巻下「五十二代平城天皇」・一九三〜一九四頁)
平城天皇の略歴が語られる最後に、「御心さどく御さえかしこくおはしましき」とある。『水鏡』では、『今鏡』と同様に、「才」が、人

物の幸、不幸と関わっているかについては、触れていない。「才」は、

ただ人物の評価軸の一つとして見なされているのである。しかも、

「才」が「かたち」と「心」・「心ばへ」という評価軸と比べても、

それほど重要視されていないと言える。では、『水鏡』の「才」は具体的にどのようなものであるか。

つぎのみかと仁明天皇と申き嵯峨天皇の第二御子御母太皇太后

橘嘉智子也弘仁十四年東宮にたち給御年十五天長十年三月六日

位につき給御年廿四世をしり給事十七年御さえかしこく管絃の

かたもいみしくおはしましきすへて御身ののういにしへのみか

ともすくれ給てくすしのかたなとさへならひたてまつる人な

かりしなり (巻下「五十五代仁明天皇」・二〇八頁)

右は、同じく仁明天皇の略歴が語られるところである。ここでは、

「才」は漢学に関するものであつて、管絃や医術と区別されている。

世あかりさえかしこかりし人の大かゝみなといひてかきをきた

るにさはみてことはいやくひかこと多くしてみどころなくも

しおちゝりて見ん人にそしりあさむかれんことうたかひなかる

へし (巻下・二二四頁)

また、『水鏡』の作者は、大鏡の作者のように「才かしこかりし人」

には及ばないとして、謙遜した態度をとっている。『水鏡』の「才」

評価の少ないことは、この跋文に表す作者の態度とどういう関係が

あるのか、今後さらに検討する必要がある。

三 『増鏡』の場合

最後に『増鏡』では、「才」ありと評価されている人物は、一七ページ【表三】の通りである。

「才」によつて評価されているのは、龜山天皇、後宇多天皇、後醍醐天皇、世良親王、いわゆる大覚寺統の天皇・親王である。また、源有房は後宇多天皇の厚い信頼を得ていた。源雅房と源親定も龜山天皇と密接な関係を持っていた。つまり、「才」がある人物として述べられているのは、大覚寺統を中心とする人物である。対する持明院統の天皇(後深草天皇、伏見天皇、後伏見天皇、花園天皇)については、「才」があるという評価はなされない。

こういった点から『今鏡』と『増鏡』の作者は、作品を描く際に、「家」ないし「皇統」というものを非常に意識しており、「才」ありと人を評価する際にも、同じような意識が現れていると指摘し得る。では、『増鏡』の「才」を、具体的に見てみよう。

御心ばへは、新院よりも少しかどめひて、あさやかにそおはしましける。御才も、やまともろこし兼ねて、いとやむことなくものし給。朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍ける。末の世に、八雲などいふ物つくらせ給へるも、この御門の御事なり。

(第一「おどろのした」・二五九頁)

順徳天皇即位の件である。「才」は「やまともろこし兼ね」といわれており、ここでの「才」は、広義の「学問における能力」を指

し、「漢字のみの字間」というように限定されてはいない。

大かた、御本性なごやかにらうくじく、御かたちもまほにうつくしうと、のほりて、二十に三ばかりや余らせ給らん。若うさかりの御ほどに、御才なども、やまと・もろこしたどくしからず、何事につけても、いとあたらしうおはしませば、世の人惜しみきこゆるさま限りなし。(第三「藤衣」・二八八頁)

また、後堀河院をかたる所でも、「和」「漢」にわたる「才」を挙げています。このように『増鏡』では、「才」の概念は漢字以外のものも含まれているが、『今鏡』のように書・管絃などの芸能まで広がっていない。

この中將、才かしこくて、末の世には、ことのほかにもてなされて、まづ一品して、しばしおはせし比、

御百首の歌に、

位山のぼりはてても霧におふる松に心を残すかな

さて終に内大臣までのぼられき。さて元応の頃かとよ、百首歌たてまつりし中に、

あつめこし窓の蛍の光もて思しよりも身をてらすかな

と詠まれ侍き。

(第十一「さしくし」・三九頁)

右の引用文では、若かった頃の源有房の、宗尊親王の娘である掬子女王との情事が語られた後に、有房の「才」が挙げられている。

傍線部で示したように、有房は晩年重用される。「あつめこし窓の蛍の光もて」という歌は、有房が、若い頃から苦勞して勉強したおか

けて、予想以上に高い位に昇ったと詠むものである。有房は太政大臣源通光の孫であるが、父の通有は正四位右少將で没し、有房も(正安二年)五十才の時には、正三位非参議に過ぎなかったのである。『増鏡』では、そんな有房が晩年に内大臣まで昇ったのは、その「才」によると評している。

土御門の前内の大臣定実、六月に太政大臣になり給ふ、いとめでたし。故大納言入道顯定の、本意なかりし御面おこし給へる、いとゆゝし。院の御覚えの人なるうへ、才もかしこくをはすれば、世に用いられ給へり。御子の雅房・中納言親定とて、いつもれも才ある人にておはしき。(第十一「さしくし」・三九八頁)

源定実の父である顯定が右大將になれず、世を恨んで高野にこもった話は、『増鏡』巻第六「おりある雲」に語られている。ここでは、定実が父の望み以上の太政大臣に任命され、父の面目を立てた話である。傍線部のように、定実は亀山院の信頼の厚い人であるうえに、「才」も優れているので、世間で尊重されていた。『大鏡』では、「才」がその持ち主である人物がある程度のところまでは昇らせるが、最後には不幸になっていくというように用いられた。『増鏡』でも、「才」はその人物があるところまで昇進させるが、『大鏡』と違って、それが不幸につながるということはなかったのである。

おわりに

以上、鏡物それぞれの「才」について検討してきた。これらの検

討により、次のようなことがいえるのではないであろうか。

『大鏡』と比べ、『今鏡』では「才」は、出世の要因や不幸には結びつかない。「才」は人物の運命を左右するほどの力を持たないのである。また、「才」は、必ずしも個人ではなく、「家」に結びつくものとして扱われていた。『水鏡』では、他の三作品のように、強く「才」に対する認識を出していない。最後の『増鏡』は、『今鏡』の「才」の認識や態度と近似し、「才」が不幸へつながるとの認識は示していない。こうしてみると、「才」はその役割を微妙に変えてきているようであるが、さらに中古から中世へという大きな歴史の流れの中でみる必要がある。また、『今鏡』・『水鏡』・『増鏡』では、特定の人物の幸、不幸を決定する要因として、「才」にかわって何が重んじられたのであろうか。この点については、院政・鎌倉初期の他の作品とも比較しながら、今後さらに検討を加えたい。

〔注〕

- (1) 広瀬裕美子 『大鏡』の「才」観 (『国語国文学研究』(熊本大学) 三四 平11・3)
- (2) 大木正義 『今鏡の表現——「書」「才」』(宇都宮大学教育学部紀要四九 第一部 平11・3)
- (3) 同注 (2)。

※引用本文は、『今鏡』は『今鏡本文及び総索引』(榊原邦彦・藤掛

和美・塚原清編)、『水鏡』は『水鏡本文及び総索引』(榊原邦彦編)、
『増鏡』は『日本古典文学大系』による。なお、傍線は、すべて私
に付した。

(付記) 本稿は広島大学国語国文学会秋季研究集会(平成十二年十
一月二十六日)で口頭発表した内容を一部改稿したものである。
席上、ご指導いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

——チエン・ウエンヤオ、広島大学大学院博士課程後期在学——

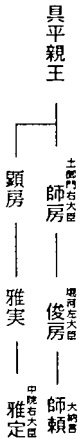
卷名	対象人物	本文
① つかさめし	後三条天皇	世を治めさせ給事、昔かしこき御世にも恥ぢずをはしましき。御身の才は、やむことなき博士にもまさらせ給へりけり。
② 源氏の宮すところ	輔仁親王	この御子は才をはして、詩など作り給事、昔の中務の宮などのやうにをはしき。
③ 内宴	後白河天皇の御子たち	御子たちも、をのく道にとりて、才をはしますと聞へさせ給へるこそ、誰も知らせ給へる事なれば、なにとかはさのみも申侍べきな。
④ ほりかはのながれ	村上源氏一族	土御門殿、堀河殿あひつぎて、御身の才も、文作らせ給方もすぐれ給へるに、土御門殿は才すぐれ、堀河殿は文作らせ給事、すぐれておはすとぞ聞え給ける。
⑤ ふちなみ	源俊房	男咎あるべしなど聞へけれど、人からの品も、身の才などもはして、世もゆるしきこゆるばかりなりけるにや、もろともに心を合せ給へればにやありけむ、さてこそ住みはて給けれ。
⑥ ほりかはのながれ	源師頼	文などひろくならひ給て、才おはする人におはしき。
⑦ にみまくら	源雅定	このおとゞに才おはして、公事などもよくつかへ給けり。
⑧ みかさの松	藤原忠通	昔より摂政関白統きてをはしませど、身の御才は類なくをはしましき。
⑨ みかさの松	藤原忠通	かく才などもをはしまして、日記なども、鏡をかけてをはしませば、
⑩ ふちのはつはな	藤原基房	御身の才も、幼くよりすぐれてをはしますとて、
⑪ かざりたち	藤原頼長	其左の大臣は、御みめもよくをはし、身の御才もひろき人になむ聞え給し。
⑫ かざりたち	藤原頼長	身の御才なども、幼くよりよき人にてをはしますと聞え給き。
⑬ こけのころも	藤原雅教	その御子には、顕隆の中納言の女の腹にをはせし、雅教の中納言と申、身の御才ひろくをはしける。
⑭ から人のあそび	藤原宗忠	御才もをはして、尚齒会とて、年老たる時の詩つくりの七人あつまりて、文作る事行ひ給ひき。
⑮ 梅のこのもと	藤原実行	親の東宮の大夫殿は、「身の才もあり、よきものにてあるに、くちをしく」とのみ歎き給けるに、
⑯ 梅のこのもと	藤原実行	この兄は才もをはし、命も長くて、太政大臣までいたり給へる、いとめでたし。

27	しがのみそぎ	嵯峨天皇の御子	よろづの文をひらき見給ければ、身の御才人にすぐれ給てをはしけるに、やむことなき博士の道をとげ給ける時、
26	たむけ	僧	円宗寺の二会の講師置かせ給て、山、三井寺の才高き僧など、位高くのり、深き道もひろまり侍なり。
25	いのるしるし	有国一族	その流れの人の、才も位も高くおはせし人の語られ侍ける。
24	内宴	藤原信西	天文などいふ事をさへならひて、才ある人になむ侍ける。
23	子曰	後一条帝	御才もかしこくおはしましけるにや。
22	宮木野	藤原公光	その御子に、左衛門督公光と申なるこそ、才などもをはして、詩も作り給。
21	宮木野	藤原実定・実家・実守	この君たち、みな才などもをはして、唐、大和の文作り給。
⑳	花ちるにはのをも	藤原公能	このをとり、管絃も身の御才も、かたたくおはすと聞へ給き。御親、祖父などは、御才もをはせぬに、詩など作り給、
㉑	竹のよ	覚珍法印	又こそ御腹にや、奈良に覚珍法印と申、当時おはす。才ある人と聞こへ給。
㉒	梅のこのもと	藤原公行	才などもおはしけるにや、弁にても仕へ給ひき。
㉓	梅のこのもと	藤原公教	才もおはし、笛もよく吹き給き。心ばえをとなくして、公事などもよくつとめ給。

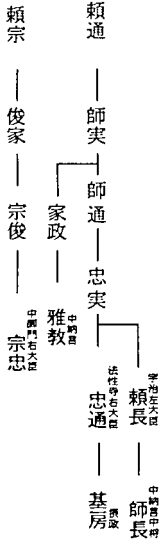
【表二】 ※太字・・「才」の評価されている人物

①後三条天皇 — 輔仁親王 — ②後白河天皇 — 御子たち

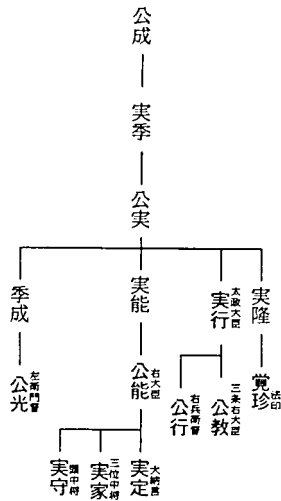
③村上源氏



④藤原氏(道長裔)



⑤ 藤原氏（公季裔）



【表三】

巻名	対象人物	本文
① おどろのした	順徳天皇	御才も、やまともろこし兼ねて、いとやむことなくものし給。
② 藤衣	後堀河天皇	若うさかりの御ほどに、御才なども、やまと・もろこしたどくしからず
③ あすか川	龜山天皇	御門は、御本上いと花やかにかしこく、御才なども昔に恥ぢず、なに事もとのほりてめでたくおはします。
④ 老のなみ	後宇多天皇	i この御門は、ねび給まゝに、いとかしこく、御才などもすぐれさせ給へば、なべて世人も目出事に思ひきこゆ。 ii 御本性もいとるはしく、のどめたるさまにおほしく、すぐやかに、御才もかしこうめでたくおはしませば、
⑤ 秋のみ山	醍醐天皇	i の御子よりも御才などもいとかしこく、よろづきやうやくに物し給へれば、
⑥ むら時雨	世良親王	この中将、オかしこくて、末の世には、ことのほかにもてなされて、
⑦ さしくし	源有房	院の御覚えの人なるうへ、オもかしこくをはすれば、世に用いられ給へり。御子の雅房・中納言親定とて、いづれもオある人にておはしき。
⑧ さしくし	源定実親子 (雅房・親定)	よろづの道くくに明らかくおはしませば、国々の才ある人多く、昔に恥ぢぬ御世にぞ有ける。
⑨ おどろのした	僧 (後鳥羽天皇)	御八講、名高く才すぐれて賢き僧どもを召したり。
⑩ あすか川	僧	